

ギレルモ・デル・トロの新作『フランケンシュタイン』のNetflixでの配信が始まり、また映画館での上映も並行して行われました。何故今の時代にフランケンシュタインかと思ひながら見てみると意外にもその精緻な構成と視覚的な迫力が相俟って甚く感動を覚えました。これまでギレルモ・デル・トロの作品を敬遠していたわけではないものの、見てこなかった我が身を恥じこれまでの作品を何本か改めて見るに至り、その尋常ではないこだわりなりホラーというジャンルには収まりきれない諸作品のメッセージ性を強く印象付けられた思いです。

今でこそ、ホラーというジャンルが確立した状態がありますが、初めてホラーという言葉が出て来たのは、アルフレッド・ヒッチコックが1960年代に来日した折に「ヒッチコック・マガジン」の編集長中原弓彦（小林信彦氏のこと）の「次回作は何ですか？」の問いに対して『サイコ』というタイトルの「ホラー映画だ」と答えたことではなかったのでしょうか。ヒッチコックの発音は「ハラウ」に近かったと聞きます。最近では、アリ・アスター（1986~）やタイ・ウエスト（1980~）といった映画作家の作品が非常に気になっているところでもあります。（タイ・ウエストの作品に主演したミア・ゴスが『フランケンシュタイン』にも主演していたのは嬉しいことです）2025年には、ライアン／クエグラーの『罪人たち』も強い印象を残しました。

『フランケンシュタイン』は、ヴィクター・フランケンシュタインが作り出した怪物が、ある種の暴力装置であると同時に繊細で豊かな知性を持ち、不死であることから孤独から逃れたいという実に人間的な複雑さを供えたキャラクターとして描かれます。多分にメッセージ性を持った、現代社会の不安を表現したものと思えます。それは、単に博愛的精神やヒューマニズムを表したのではなく、怪物の背負わされた不幸の数々を目の当たりにすることで、人間の持つ身勝手さを思い知り、その傲慢さに呆れるばかりです。原作者のメアリー・シェリー（1797-1851）はロンドン生まれの小説家であり、本作を18歳で執筆し始めたという驚くべき人間観察と洞察力を持った人物でした。

2025年来日したギレルモ・デル・トロはインタビューに対して、これまで製作された映画『フランケンシュタイン』をほぼ見てきたと自負し、「メアリー・シェリーの小説からは100本の名作が作れるほど多くの視点と可能性があると考えています」と原作の持つ文学的なエッセンスにも深く共感し、「ロマン主義文学は単なる美や理想ではなく、“愛・生命・死”の融合を描く哲学的運動です。この3つを理解することこそ、人間になるために必

要なことだと思っています」と本作でも重視した物語のテーマを挙げています。（猪俣創平氏の取材・文から）

ギレルモ・デル・トロには『シェイプ・オブ・ウォーター』（2017）という傑作があり、これは『大アマゾン半魚人』（1954）からインスパイアされたとありますが、これは『フランケンシュタイン』の前段を成す、『フランケンシュタイン』以上の純愛物語であり、ハンディキャップを乗り越えた男女が愛を獲得した心洗われる作品です。サリー・ホーキンスの名演が心に残ります。半魚人役のダグ・ジョーンズも。過去の作品群が収斂された形で『フランケンシュタイン』に辿り着いたと言えるのかもしれませんが。さらにギレルモ・デル・トロの目指すものは何であるのか興味を引くところでもあります。

ギレルモ・デル・トロの根底にあるのは、「オタク」としての偏執狂的な独自の世界観の表現を目指す映画作家としての矜持ではないでしょうか。それは、『パシフィック・リム』（2013）に登場する生物学者ニュートの姿に重なるのです。この作品でゲームディレクター小島秀夫氏も本作を「究極のオタク映画」と呼び、「まさかこんな映画を観られるとは夢にも思わなかった」と述べたとあります。SF作家のウィリアム・ギブソンは本作を「知的で、しばしば素晴らしくウィットに富んだビジュアルデザインの見事な展示、すべてのフレームが首尾一貫した言葉で生き生きとしており、本質的には子供向けの物語であるものに貢献している...朽ちることのない、決してフェティッシュ化しないバロック」と評しましたが、まさに的を得た意見です。スペースオペラであり、本質的には「怪獣映画」なのです。これは。この作品のエンドロールでは、「”モンスター・マスター”レイ・ハリーハウゼンと本多猪四郎に捧ぐ」と出て来ます。レイ・ハリーハウゼン（1920-2013）はL.A.出身の特殊映画監督で、今や懐かしい『恐竜百万年』（1966）や『シンドバット』ものを手がけた人物ですし、本多猪四郎監督については言うまでもないでしょう。ただ、円谷英二氏（1901-1970）の存在を忘れた訳ではないでしょうが。

デル・トロと日本映画の関係に目を向けると、来日時インタビューで、日本のアニメや特撮、特に怪獣映画から多大な影響を受けてきたことを語り、特に好きな怪獣映画は、本多猪四郎監督の『フランケンシュタイン対地底怪獣』（1965年）だと即答し、「子どもの頃に見て、強い影響を受けました。怪獣では特にバラゴンが好きです」とのこと。筆者も封切時にこの作品を見て、通常の怪獣映画から感じ取れないその悲劇的内容に感動した覚えがあります。まさか、デル・トロの口からこの作品のことが出てくるとは予想していませんでしたが。そして、「同じ物語の中に、怪獣と第二次世界大戦という歴史が存在していたのが斬新で、ドイツの潜水艦でフラ

ンケンシュタインの心臓を運ぶ設定は衝撃的でした。その映画のフランケンシュタインはとても無垢で、成長し続けるがゆえに世界になじめないキャラクターでしたね。今でも私はその作品を深く愛しています。ただ、怪獣はもっと根源的で宇宙的な存在です。その一方で、自分が今回描いたフランケンシュタインは精神的なメタファーだと思っています」と語ります。

デル・トロを知る上では次の発言も重要な要素を含みます。「私は自分のためにしか映画を作りません。自分が心から愛せる作品だけを作ることが重要なのであって、興味のない映画製作を引き受けたことは一度もありません。だから、仕事相手が思い描くものと、自分が描きたいと思うものが違う時はその場から去ることが私のルールです。たとえば『ブレイド2』（2002年）も『ヘルボーイ』（2004年）もすべて個人的な作品です」

『フランケンシュタイン』を含めて、デル・トロの作品には、「異形の者の人間性の探究」というテーマが描かれているという指摘があります。“異形の者”は、半魚人、ピノッキオそしてフランケンシュタイン（正確にはフランケンシュタインの創造物と言うべきでしょう）という形で出現しますが、彼らは永遠の生命と共に永遠に生きることの苦痛を体験せざるを得ない孤独な生き方を迫られることとなります。そうなれば「人間性の追求」では収まりきれない重層的なレイヤーが発生しているかのようです。“異形の者”に置き換えなければ表現できない人間性というものへの疑義と危機ではないかと思えるのです。ゴシック・ホラー、ネオ・ノワール・サイコロジカル・スリラー、ロマンティック・ダーク・ファンタジー、サイエンス・フィクション・ホラーといったジャンルでデル・トロの作品群は紹介されるものの、その作品群はカオスに満ちた現代の社会への警鐘と人間性の回帰を訴えるものではないかと考えるのです。

今、メキシコの映画作家といえば、あのアレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥ（1963~）とアルフォンソ・キュアソン（1961~）という実力派が台頭しています。イニャリトゥは2017年以来となる新作『Judy』がアメリカで2026年10月からの公開が決まったようで大変楽しみですが、キュアソンは2018年の傑作『ROMA』以降作品を送り出していないのは寂しい限りです。